

# アポーハ論におけるダルモータラの 〈2種の否定〉解釈

—— 〈他の排除〉 (*anyāpoha*) の分類に関連して ——

石 田 尚 敬

## 0. はじめに

ダルモータラ (ca. 740–800) の『アポーハプラカラナ』は、小編ながら、仏教認識論・論理学の言語哲学を代表するアポーハ論 (〈他の排除〉論) を詳細に論じた著作として、思想史上、重要な意味を持っている。ただし、本書全体のサンスクリット語原典は現存せず、その解説は、ウィーン大学の碩学フラウワルナー博士によるチベット語訳テキストの校訂と訳注研究によって端緒が開かれた<sup>1)</sup>。その研究は、現在でもその価値を失っていないが、本研究に対してこれまで指摘された重要かつ本質的な修正点のひとつに、同書で用いられる〈2種の否定〉の解釈についての赤松明彦博士の指摘がある<sup>2)</sup>。

フラウワルナー博士は、『アポーハプラカラナ』に見られる〈2種の否定〉に相当するチベット訳語、“*med par dgag pa*” (*med dgag*) と “*ma yin par dgag pa*” (*ma yin dgag*) について、前者を「純粹否定」(*prasajyapratishedha*)、後者を「定立的否定」(*pariyudāsa*) とする通例の用法に反し、『アポーハプラカラナ』においてのみ、逆に解釈すべきと指摘した<sup>3)</sup>。この点について、赤松博士は、サンスクリット語原典テキストが公刊されたジュニャーナシュリーミトラ (10世紀頃) 著『アポーハプラカラナ』におけるダルモータラ説への言及を分析

し、フラウワルナー博士の特殊な解釈の必要性がないことを明らかにした。

本稿では、上述の研究を受けるものとして、『アポーハプラカラナ』において用いられる〈2種の否定〉の意味を再考する。本稿で考察の対象とされるテキストは、先行研究で用いられたものと多くが重複する。ただし、筆者がこれまで考察してきた、ダルモッタラに先行するシャーンタラクシタ（ca. 724–788）などの思想家の学説を考慮し<sup>4)</sup>、またダルモッタラ概念知（分別知）の理解を踏まえた上でテキストを読み直すこと<sup>5)</sup>、ダルモッタラの主張をより明確に理解し、その独自性にも、新たな視点が得られるものとする。最後に、シャーンタラクシタの学説との比較という点から、〈他の排除〉(*anyāpoha*) の分類についても考察することとしたい。

## 1. ダルモッタラのアポーハ論の基本的理解

ダルモッタラは、『アポーハプラカラナ』冒頭の帰敬偈において、自らのアポーハ論解釈を的確に要約している。最初に、その主張を確認しておきたい。

「概念知により、他の諸々のものとは区別されたもの (*rūpa*) として描き出されるもの、[それは、] 知でもなく、外界 [対象] でもない。まさにそれは、非真実の虚構されたものに他ならないと述べられ、世人に真実を語られた、あらゆる過失という敵に勝利する者。その教示者に叩頭して帰敬した後、この [論書] で、そのアポーハが、詳述される。」

*buddhyā kalpikayā viviktam aparair yad rūpam ullikhyate buddhir  
no na bahir yad eva ca vadan nistattvam āropitam / yas tattvaṃ  
jagate jagāda vijayī niḥśeṣadoṣadviṣāṃ vaktāraṃ tam iha praṇamya  
śīrasā'pohaḥ sa vistāryate //* (cf. 石田2014a: 789)

ここでは、非真実の〈虚構されたもの〉<sup>6)</sup>が、概念知によって描き出されるもの、すなわち概念知の対象と考えられていることが確認さ

れる。そしてそれは、外界対象や認識（＝知）それ自身ではないとされている。さらに、特に本稿では、偈の最終部において、非真実の〈虚構されたもの〉が、「アポーハ」（*apoha*）すなわち〈他の排除〉（*anyāpoha*）と同一視されている点に留意しておきたい。

## 2. 〈虚構されたもの〉と個別相の関係

前節で確認した通り、ダルモータラによれば、非真実の〈虚構されたもの〉が概念知の対象であった。仏教論理学派の学説では、概念知の正しさは、その認識に基づいて行動したのち、実際に個物（個別相）が獲得されることで保証される<sup>7)</sup>。その場合、概念知が〈虚構されたもの〉を知らしめるという見解においても、〈虚構されたもの〉と実在する〈個別相〉を関連させることができないからではない。その点に関して、ダルモータラは次のように自問する（当該箇所をの原典テキストの大部分は、Frauwallner 1937 及び赤松1984により同定されている<sup>8)</sup>）。

「さらにまた、〈非真実のもの〉（＝虚構されたもの）を示す概念知は、どのようにして（その非真実のものを）外界 [対象] と相似したものとして示すことができるだろうか。その両者（非真実のものと外界対象）は絶対的に異なるからである。」（下線部はサンスクリット語断片による。）

*g'zan yañ mi bden pa'i rañ b'zin ston pa'i rnam par rtog pa phyi rol  
'dra ba kun du ston par ji ltar 'gyur te | de gñis ni śin tu chos mi mthun  
pa'i phyir ro* || [下線部：*asatyarūpam ādarśayan vikalpaḥ katham  
bāhyasadrśam ādarśayet, tayor atyantavidharmyāt.*] (AP<sub>F</sub> 244,25-27)

概念知に基づく外界対象への活動を可能とする、〈虚構されたもの〉と外界対象との関連を、ダルモータラは「外界 [対象] との相似」（*bāhyasadrśa*）と表現している。上に引用した文章に続けて、以下のように述べられる。

「したがって、概念知は、そのようなもの（\**tadrūpa*, =非真実の

もの)を〈他から排除されたもの〉と確定する時、(それを)外界 [対象] と相似するものとして示すことになる。」

*de'i phyir de'i rañ bžin gžan las ldog par žen pa na rnam par rtog pa  
phyi rol 'dra bar kun tu ston par 'gyur ba yin no* || (AP<sub>F</sub> 244,27–28)

この説明だけでは、概念知が、〈非真実のもの〉すなわち〈虚構されたもの〉を、〈他から排除されたもの〉として確定した場合に、どうして概念知の対象と外界対象との相似性が成立するのかわかりにくい。しかしながら、引き続いて論証式が提示され、その内容が説明される。

「【遍充関係】全く異なるものを同一のものとして把握するもの、それは〈他の排除〉によってもたらされた相似性の把握に専心する。たとえば、布は壺と全く異なるけれども、〈木でないもの〉という限定を受けて把握される場合に、「これ（布）も木でなければ、これ（壺）も木でない」というならば、[布が]〈壺と相似したもの〉として把握されるようなものである。

【主題所属性】同様に、概念知の対象（＝非真実のもの）は、外界 [対象] と全く異なるけれども、外界 [対象] と把握されるものである<sup>9)</sup>。」

*gañ žig śin tu mi 'dra ba de'i rañ bžin du 'dzin pa de ni gžan las bzlog  
pas byas pa'i 'dra bar 'dzin pa lhur len pa yin te | dper na snam bu bum  
pa dañ śin tu mi 'dra yañ śiñ ma yin par khyad par can du nes par rtogs  
pa na 'di yañ śiñ ma yin na 'di yañ śiñ ma yin žes yin na bum pa dañ  
'dra bar nes par rtogs pa bžin no* || *de bžin du rnam par rtog pa'i don  
phyi rol dañ śin tu mi mthun pa yañ phyi rol du nes par rtogs pa yin no*  
|| (AP<sub>F</sub> 244,29–245,4)

ここで、布と壺が「木と異なる」（＝木からの排除）という点で同じものと把握されるという議論は、あたかも詭弁のように聞こえるが、「あるものと異なる」（あるものからの排除）という〈他の排除〉を通して、外界対象である〈個別相〉と概念知の対象である〈虚構された

もの〉が類似性を持つという議論は、ひとまず理解できよう。すなわち、外界対象に「非牛の否定」が成り立つ場合、〈虚構されたもの〉にも「非牛の否定」が成り立つと説明することができる。概念知は、非真実の〈虚構されたもの〉を対象とするが、それが、〈他から排除されたもの〉と把握される場合に、同じく〈他の排除〉を有する個物（個別相）との連関が確保されるのである。

### 3. ダルモータラによる〈2種の否定〉の議論

前節において、実在である〈個別相〉と概念知の対象である〈虚構されたもの〉が〈他の排除〉を有することによって相似性を持つという点は確認できた。ここで、ダルモータラによる〈2種の否定〉の概念を用いた議論を確認したい。

ここで、〈2種の否定〉とは、「純粹否定」(*prasajyapratishedha*)と「定立的否定」(*paryudāsa*)を指すが、アポーハ論の議論においてこれらの概念が導入される場合、前者の「純粹否定」は、純粹に〈否定そのもの〉ないし〈否定作用〉を意味し、後者の「定立的否定」は、〈否定〉と同時に何らかの〈肯定〉ないし〈肯定的なもの〉を含意するものとして扱われる<sup>10)</sup>。特に、ダルモータラやそれに先立つシャーンタラクシタのアポーハ論において、後者の「定立的否定」は、肯定的な事物 (*vastu*) や性質 (*rūpa*) を指すものとして扱われることに注意しておきたい。

それでは、ダルモータラの議論を参照しよう<sup>11)</sup>。

「概念知が、〈他の排除〉を虚構しつつ、外界対象の〈他の排除〉を理解させる。その時、他の実在の〈純粹否定〉だけによって、実在に触れることにより、実在を理解するのであるから、語と概念知は〈純粹否定〉(*prasajyapratishedha*)に向かうものであり、〈定立的否定〉(*paryudāsa*)に対して働くのではない。」

*gañ gi tshe rnam par rtog pa gžan las ldog par sgro 'dogs pa na phyi rol gyi gžan las ldog par rtogs par byed pa de'i tshe dños po gžan med*

*par bkag pa ñid kyis dños po la reg pas dños po rtogs pa yin pa'i phyir  
sgra dañ rnam par rtog pa med par dgag pa la phyogs pa yin gyi | ma  
yin par dgag pa la 'jug pa ni ma yin no ||*（強調筆者、AP<sub>F</sub> 251,3-7）

ここでは、前節で見たように、「非Xの否定」という否定（排除）によって〈実在〉（＝個別相）と〈概念知の対象〉（＝虚構されたもの）の間に相似性をもたらされることを念頭に置いた上で、概念知はあくまでも〈他の排除〉を通して実在に触れるのであるから、語および概念が、他の肯定的なものを含意するような〈定立的否定〉を求めることはありえないことが主張される。したがって、語や概念の対象となるのは、実在する〈個別相〉のレベルでも、概念知の対象となる〈虚構されたもの〉のレベルにおいても、〈純粹否定〉となるのである。ダルモータラは、続けて以下のように述べる。

「したがって、[人は、]〈純粹否定〉(*prasajyapratishedha*)を虚構しつつ理解する場合、[虚構されたものと外界対象（＝個別相）を]同一のものと思ひ込むことによって、外界対象の〈純粹否定〉(*prasajyapratishedha*)を確定するのである。したがって、外界対象の〈あるものの欠如〉（＝他の排除）は、概念知によって確定されるものであり、〈虚構されたもの〉の〈あるものの欠如〉（＝他の排除）は（概念知によって）把握されるものである。したがって、師ダルマキールティもまた、〈純粹否定〉(*prasajyapratishedha*)だけを認めていることは確実である。」

*de'i phyir med par dgag pa sgro 'dogs par rtogs pa na tha mi dad par  
žen pas phyi rol gyi med par dgag pa ñes pa yin no || des na phyi rol gyi  
cig śos kyis stoñ pa ni rnam par rtog pas ñes par byas pa yin la | sgro  
btags pa'i cig śos kyis stoñ pa ni gzuñ bar bya ba yin no || de ñid kyi  
phyir na slob dpon chos kyi grags pa yañ med par dgag pa ñid bžed par  
gdon mi za'o ||*（強調筆者、AP<sub>F</sub> 251,7-12）

ここにおいて、認識者が、〈虚構〉のレベルにおいて成立する〈純粹否定〉を通して、外界対象の〈純粹否定〉を確定することが明確に述

べられる。また、ダルモータラは、「あるものの欠如」(*cig śos kyis ston pa*)と表現するが、そのような〈他の排除〉が、〈外界対象〉と〈虚構されたもの〉という二つのレベルにおいてそれぞれ成立することが明言され、各々が概念知の〈確定対象〉と〈把握対象〉という性格の異なる対象となることが認められている。

また、上記の引用において、ダルモータラにより、「〈純粹否定〉を虚構しつつ」と述べられていることにも注意しておきたい。ダルモータラは、冒頭偈などで、〈虚構されたもの〉が概念知の対象であると述べており、「(概念知により) 事物が他から排除されたものとして虚構される」(*dños po gźan las ldog par sgro btags pa*)<sup>12)</sup>とも述べ、〈虚構されたもの〉と、〈純粹否定〉としての〈他の排除〉を別個のものとして述べている箇所も見られる。ただし、上記の引用箇所のように、概念知が〈純粹否定〉ないし〈他の排除〉を虚構すると述べている箇所も存在することを指摘しておきたい<sup>13)</sup>。

【問】これにより、『[概念知は、]〈他の排除〉を本質とするものとして虚構する』ということにどうしてなるのか。【答】概念知は、非真実（無明）であることを本質とするから、個別相を把握することはできないのである。」

*de'i phyir gźan sel ba'i rañ bzin du sgro btags pa źes bya bar ji ltar 'gyur źe na | rnam par rtog pa ni ma rig pa'i bdag ñid yin pa'i phyir rañ gi mtshan ñid 'dzin par ni mi nus so ||* (AP<sub>F</sub> 246,11-14)

概念知は、〈虚構されたもの〉を対象とするとも、〈純粹否定〉ないし〈他の排除〉を虚構するとも述べられるが、特に、実在する個別相との連関を考える場合において、〈純粹否定〉(*prasajyaprañiśedha*)を志向するものであるというのが、ダルモータラの見解であると言えよう。

なお、上記の言明 (AP<sub>F</sub> 251,7-12) は、仏教論理学の大成者であるダルマキールティ（7世紀頃）もまた、〈純粹否定〉(*prasajyaprañiśedha*)だけを認めていたと主張する、思想史上有意義なものでもあった<sup>14)</sup>。

#### 4. 先行研究の理解

さて、本稿の冒頭で、Frauwallner 1937は『アポーハプラカラナ』における“*med par dgag pa*” (*med dgag*) と“*ma yin par dgag pa*”を通例とは逆に解釈しており、その点が赤松1984によって指摘され、修正されていることに触れた。赤松1984は、以下のように評価する（〔 〕は筆者補足）。

「Dh[armottara]のApoha説は、Frauwallnerを誤らせるほど、極端にApohaの否定的側面を強調したものであったといえるのではなかろうか。」（赤松1984: 79）

ダルモータラが否定的側面を強調したことは確かに正しいと言える。ただし、ダルモータラは、個別相や概念知の対象となる〈非真実の虚構されたもの〉自体を否定するのではなく、その両者の〈相似性〉をもたらしものとして、〈他の排除〉特に〈純粹否定〉(*prasajyapratishedha*)を重視している点は、指摘しておきたい。本稿での検討によれば、ダルモータラは、概念知の、それ自身の対象と外界対象との関係を綿密に分析し、語や概念は、〈純粹否定〉(*med par dgag pa, prasajyapratishedha*)である〈他の排除〉を対象としなければならないことを結論付けていることがわかる。

また、Frauwallner 1937の〈2種の否定〉に関する解釈については、当時の研究の進展状況においては十分理解できることであるものの、ダルモータラの説明を、シャーントラクシタの『真理綱要』(*Tattvasaṅgraha*)第16章「語意考察」(*śabdārthaparīkṣā*)における〈2種の否定〉の用法に一致させて理解しようとしたと考えるのが妥当に思われる。かつて論じたように<sup>15)</sup>、シャーントラクシタは、シャーキャブッディ (ca. 680-720) の影響を受けつつ、〈2種の否定〉の概念を導入した上で、3つの項目を次のようにまとめている。



純粹否定 (*prasajyapratīṣedha*)——否定 (=他の排除) のみ

定立的否定 (*pariyudāsa*) —— 個別相 (*svalakṣaṇa*)  
—— 概念知の影像 (*pratibimbaka, pratibimba*)

ここでは、〈個別相〉や概念知の対象となる〈概念知の影像〉は〈定立的否定〉 (*pariyudāsa*) のもとに位置づけられる。さらに、主要な語の意味とされるのは、〈定立的否定〉 (*pariyudāsa*) に分類される〈概念知の影像〉であった。本稿で改めて考察したように、ダルモータラは、たとえ〈定立的否定〉という概念の下に位置づけられたものであったとしても、語や概念が「肯定的なもの」を対象とすることは認めていない。ダルモータラは、シャーンタラクシタの議論を十分意識しつつ、異なった形で〈2種の否定〉を用いていると推察されるが、フラウワルナー博士のように〈純粹否定〉と〈定立的否定〉を逆に解釈した場合、両者は似通った議論を行っていると理解されてしまうことになる<sup>16)</sup>。

## 5. 結論

ダルモータラは、語や概念の対象は〈純粹否定〉 (*prasajyapratīṣedha*) であるとする。その意図を汲めば、〈他の排除〉は常に〈純粹否定〉1種に解されるべきものである。ただし、〈純粹否定〉の成り立つ場として、〈個別相〉と語や概念知の対象である〈虚構されたもの〉を考えており、〈他の排除〉は2項目に関係するとも言える。まとめれば、以下の図のようになろう。

純粹否定 (*prasajyapratīṣedha*) —— 個別相 (*svalakṣaṇa*)  
—— 非真実の虚構されたもの (*āropita*)

しかしながら、ダルモータラのアポーハ論においては、〈他の排除〉の分類といった議論よりも、〈概念知〉がいかに外界対象と関わるかという点が考察され、詳述されており、そこに有意義な議論の展開を見出すべきと考える。すなわち、概念知の対象と外界対象 (個別相) を関連させる要素として、〈純粹否定〉 (*prasajyapratīṣedha*) としての

〈他の排除〉(*anyāpoha*) が想定されており、人がなんらかの対象を認識し、行動を起こす場面において、〈他の排除〉は必須の要素として要請されることとなる。

## 註

- \* 本稿は2015年9月20日、高野山大学で開催された日本印度学仏教学会第67回学術大会において発表したものを修正・加筆したものである。
- 1) Frauwallner 1937参照。
  - 2) 赤松1984、Akamatsu 1986参照。
  - 3) Cf. Frauwallner 1937, p. 263, n. 1: *med-par-gag-pa* gibt in unserm Text *pariyudāsaḥ* wieder (vgl. fol. 264a2ff.), während es z. B. in der tibetischen Übersetzung des *Tattvasaṃgrahaḥ*, v. 1004ff. für *prasajyapratīṣedhaḥ* steht und *pariyudāsaḥ* durch *ma-yin-par-dgag-pa* ausgedrückt wird.
  - 4) シャーンタラクシタのアポーハ論の概要については、Ishida 2011 (石田2005) を参照。
  - 5) 石田2014、石田2016参照。
  - 6) 筆者が〈虚構されたもの〉と訳した概念知の対象について、〈もの〉に相当する原語として、ダルモータラは、“*rūpa*” (*āropita-rūpa*) を用いている。赤松1984: 77に提示されたサンスクリット語断片では、〈非真実のもの〉(*asatyarūpa*) と表現されるが、同じ“*rūpa*” が用いられていることは単なる偶然ではない。ダルモータラは、「形象」(*ākāra* または *pratibhāsa*) や「影像」(*pratibimba* または *pratibimbaka*) の語を、シャーンタラクシタなどの先行する思想家と異なる意味に用いており、〈形象〉や〈影像〉は、自己認識の対象とされ、その限りにおいて、認識の一部として実在性が認められるものと理解される。一方、非真実の〈虚構されたもの〉こそが、概念知の対象となる。このようなダルモータラの場合の概念知の理解については石田2014b を、シャーンタラクシタの理解との比較については、石田2016を参照されたい。
  - 7) ダルマキールティは、認識手段を、「欺かないものであり、効果的作用（目的実現）の定まったもの」と定義する。Cf. PV 2.1ab: *pramāṇam avisaṃvādi jñānam arthakriyāsthītiḥ*。なお、ダルモータラは『アポーハ・プラカラナ』を著述するにあたって経量部の立場に立っており、外界対象を積極的に否定することはない。同著の帰敬偈に続く冒頭部の論述では、以下のように述べられる。Cf. AP<sub>F</sub> 235,9-236,1: *'di la mñon par 'dod pa'i*

'bras bu skyed par ruñ ba'i dños po rtogs par bya ba'i phyir brda rab tu sbyar  
ba'i sgra dag gis ji lta bu'i dños po rtogs par byas nas de dag la tha sñad byed pa  
po don du gñer ba 'jug par byed do || de'i phyir 'di dag yul med pa ni ma yin no ||  
「この世界において、望まれた結果をもたらすことができるものの理解の  
ために、言語協約を備えた諸々の語によってあるものを理解した後、それ  
ら [のもの] に対し、利益を求める (\*arthin) 行為者 (\*vyavaharṭṛ) は行  
動を起こす。したがって、それら [の語] は、対象 (yul, \*viṣaya) を持た  
ないわけではない。」

- 8) Frauwallner 1937: 267, n. 1, 赤松1984: 77, 11-12参照。
- 9) 【結論】したがって、概念知は、〈他の排除〉によってもたらされた相似  
性の把握に専心する。
- 10) 文法学派で用いられる〈2種の否定〉の概念については、Cardona 1967  
を参照されたい。
- 11) 赤松1984: 77-78に和訳されている。「概念作用が、〔それ自身に〕「他者  
の否定」(anyavyāvṛtti) を付託 (samāropa) しつつ、外界実在に実際に属す  
る「他者の否定」を知らしめる時、それ〔概念作用〕はこの「他の事物の  
否定」(arthāntarapratiṣedha) を通じて〔外界に〕実在する事物に触れるの  
であり、〔それによって〕外界事物を認識するのである。それゆえ、語や  
概念は第一義的に純粹否定 (prasajyapratīṣedha; med par dgag pa) をめざす  
ものであり、相関的否定 (paryudāsa; ma yin par dgag pa) とかわるもの  
ではない。したがって、人は純粹否定を理解した時に、〔概念知自体の表  
象に〕これを付託し、〔外界実在に存する他者の純粹否定との間のそれと  
の〕非-相違 (abheda) を確定することによって、外界実在に属する純粹  
否定を確定するのである。かくして、〔一方では、〕ある外界事物における  
他者の非-存在 (itarasūnya) が概念作用によって確定され、〔他方、〕付託  
理解されたもの (samāropita) における他者の非-存在も〔同時に〕理解され  
るのである。」なお、筆者とは、非真実の〈虚構されたもの〉(āropita) に  
ついての翻訳を除けば内容的に大きな差はないが、〈他の排除〉が、〈虚構  
されたもの〉と〈個別相〉の類似性をもたらすことを示した論証式を踏ま  
えた上で、上記のテキストを読み直す必要性を指摘しておきたい。なお、  
ダルモータラにおける〈虚構されたもの〉と〈形象〉の関係については  
石田2014bを、ダルモータラと先行するシャーントラクシタとの比較に  
ついては石田2016を参照されたい。

ここで、フラウワルナー博士は、〈純粹否定〉と〈定立的否定〉を逆  
に解釈している。Cf. Frauwallner 1937: 274: “Die Worte und Vorstellung sind  
also auf die Ausschließung (paryudāsa) gerichtet und beziehen sich nicht auf die  
ausschließende Verneinung (prasajyapratīṣedha).”

- 12) Cf. AP<sub>F</sub> 246,3.
- 13) この点について、『アポーハプラカラナ』の帰敬偈で、ダルモータラが、概念知の対象である〈虚構されたもの〉と〈アポーハ〉（＝他の排除）を同値していたことを想起されたい。
- 14) ダルモータラのここでの議論は、ダルマキールティの PV 3.164 の言明を展開させたものとも言えよう。Cf. PV 3: 164: *vikalpapratibimbeṣu tanniṣṭheṣu nibadhyate / tato 'nyāpohaniṣṭhatvād uktānyapohakṛc churutih* // 「[言葉は、] それ（外界対象の能力が、同じ結果を持たないものから排除されていること）を志向する（＝対象とする）〈分別知 [に現れる] 影像〉に結びつけられる。それゆえ、〈他の排除〉を志向する（＝対象とする）から、「言葉は他者の排除をなす」と [師ディグナーガは] 述べたのである。」本詩節は、戸崎 1979、片岡 2012: 116 にも和訳されている。
- 15) Ishida 2011（石田 2005）参照。
- 16) この点が、Frauwallner 1937 の「ダルモータラのアポーハ論はそれまでの議論と本質的差異はない」という結論の根拠になっている可能性があるとするれば、注意されねばならない。なお、片岡啓博士は、ニヤーヤ派のジャヤンタやミーマンサー派のスチャリタミシュラによるアポーハ説への言及を考察し、ダルモータラの主張をディグナーガやダルマキールティのものとは異なるものとして評価し、アポーハ論の思想史を描き出している。その成果については、片岡 2010 を初めとする一連の論考を参照されたい。

#### 略号表

- AP<sub>F</sub> Anyāpohaprakaraṇa (Dharmottara): Ed. Erich Frauwallner, s. Frauwallner 1937, 235–254.
- PV 2 Pramāṇavārttika (Dharmakīrti), chapter 2: Ed. Yūshō Miyasaka. “Pramāṇavārttika-Kārikā (Sanskrit and Tibetan).” *Acta Indologica* 2, 1971/72, 1–206 (PV2 = Pramāṇasiddhi).
- PV 3 Pramāṇavārttika (Dharmakīrti), chapter 3: see 戸崎 1979.

#### 参考文献

- Akamatsu, Akihiko. 1986 “Vidhivādin et Pratiṣedhavādin: Double aspect présenté par la théorie sémantique du bouddhisme indien.” *Zinbun* 21, 67–89.
- Cardona, George. 1967 “Negation in Pāṇinian Rules,” *Language* 43(1), 34–56.
- Frauwallner, Erich. 1937 “Beiträge zur Apohalehre. II. Dharmottara.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 33, 1937, 233–287.
- Ishida, Hisataka. 2011 “On the classification of *anyāpoha*.” *Religion and Logic*

- in Buddhist Philosophical Analysis*. Ed. Helmut Krasser et. al. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2011, 193–206. (石田尚敬 2005 「他の排除 (anyāpoha)」の分類について—Śākyabuddhi と Śāntaraksita による〈他の排除〉の3分類」『インド学仏教学研究』12, 86–100.)
- 赤松明彦 1984 「Dharmottara の Apoha 論再考—Jñānaśrīmitra の批判から—」『印度学仏教学研究』33(1): 76–82.
- 石田尚敬 2014a 「『*Apoḥaprakaraṇa*』の冒頭偈について」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』東京：佼成出版社、783–792.
- 石田尚敬 2014b 「ダルモッタラによる分別知の考察」『印度学仏教学研究』62(2), 988–984.
- 石田尚敬 2016 「仏教論理学派における分別知の考察—シャーンタラクシタとダルモッタラの比較から—」『佛教学』57, 19–36(L).
- 片岡啓 2010 「三つのアポーハ論—ダルモッタラに至るモデルの変遷」『南アジア古典学』5, 251–284.
- 片岡啓 2012 「アポーハとは何か？」『インド論理学研究』V, 109–134.
- 戸崎宏正 1979 『仏教認識論の研究』東京：大東出版社.

(2019年度科学研究費補助金・若手研究・課題番号18K12203による研究成果の一部)